(4) 南海の寂滅

南海の日々の生活は、経文読誦に明け、経文読誦に暮れることが多かつたが、時には百姓共を集めて布教し、時には酒宴をはり琴などを弾じて人々を楽しませた。またイヌ、猿を相手に畑を耕し、牛蒡、芹その他種々の野菜を取つたり、猿をして枯枝を集めさせ、イヌがこれをはこぶなど、平和な日々であつた。

だが年月の流れは早く、南海は早くも百三十五才になつていた。或る日南海は近くに住む比丘を呼び「きよう呼んだのはほかではないが、今年は我の寂滅の年にあたる、多くの書籍はその方に与えよう、御身は未だ春秋に富む身である。我なき後に尋ねくる人あらばよく教えさとしてくれ」といい、イヌと猿に向つてはまるで人にものいう如く「イヌよ汝はこの東の山野に住んで人々を救え、猿よ汝はこの庵の近き山林に住め、汝等現世は畜生なれど来世は畜生道をのがれることができるであろう」、「この経文は庵の門の左右に埋め記念として松を植える。この松は、雌雄の松で大いに繁るであろう」といい、自ら門のそばに穴を掘り経文をうめた。「これで総べての仕事は終つた、では別れの盃を用意しよう」

これを聞いて比丘は驚き且悲しみ、麓の村にはせて、村人達にその有様を知らせた。村人も余りの突然のことに驚き、いくらか用意をして続々と庵に集まつた。南海は衣を改め、座を正して村人に対し最後の説法をした。村人は泣く泣く別れの法話を聞き、いましばらくとどまつて欲しいと懇願した。説法を終えた南海は村人のため琴を弾じ酒宴を開いた。だが村人達はいくら飲んでも酔うことができなかつた。

そして一刻程すぎた頃、南海は静かに米ヶ森にむかつて呪文を唱えたかと思うと、一叢の五色の雲が湧き、倉手の山にたなびき、妙なる音楽が湧き始めた。村人達はあれよあれよと騒ぎ見るうち、南海は檀上に静かに立ち九字を切り、ひとはねはね上つたかと見えたら、其の身は忽ち五色の雲の中に消え去つた。村人達は声を合せ、「南海様、今一度お姿を拝ませたまえ」と叫び続けたが、その甲斐もなく、雲は次第に米ヶ森の山蔭へとかくれ去つた。この雲の消え去つたところを「山伏岱」といつている。人々は夢見る心地して泣き泣き庵を立ち去つたという。

その後、南海の遺言通り庵の門には二株の松が生えた。村人達はこの松を相経の松、または愛敬の松といつた。